

## 幼児の身体活動性を高める要因の検討

鈴木 裕子

### I. はじめに

本稿の目的は、「子どもアクティビティ尺度」<sup>1)</sup>の開発過程で得られた知見を手がかりに、幼児の身体活動性を高めるにはどのような要因が重要なのか、どのような視点で子どもたちを捉えていくことが求められているのかについて論じることにあ

る。「子どもアクティビティ尺度」は、保育現場における幼児や保育者との関わりの中で生まれた問題意識に動機づけられ、どのようにしたら子どもたちの身体活動量を増強させ、活動意欲を形成させることができるのかとの課題解決に向けて、筆者が開発を試みたものである。子どもたちのアクティビティを高めたいという願いを込めて、本尺度は命名された。ここで用いるアクティビティとは、身体活動場面における「からだところ」の相互作用の諸相を示す言葉として、「身体活動性」と同義なものと定義しておきたい。

検討を進めるにあたり、理解を共有するために、「子どもアクティビティ尺度」開発の経緯を記すことからはじめたい。

### II. 幼児における身体活動評価尺度（子どもアクティビティ尺度）開発の概要

#### 1. 尺度開発の動機と意義

本尺度を開発したいという思いに至ったのは、筆者らが行ってきた一連の測定や調査を通して、子どもたちを取り巻く状況に危機感を抱いたからである。

1999年、幼児の身体活動量増強と活動意欲形成の介入に役立てる基礎資料を得る目的で、愛知県内R幼稚園4、5歳児180名を対象に運動能力検査を実施し、全国調査の結果<sup>2)</sup>との比較から問題点を把握した<sup>3)</sup>。当該幼稚園における運動能力は、4歳後半からすでに男女差がみられ、特に女児では、運動能力評定点が高低に二極化する傾向が認められた。その後、保育者からは、女児はか

なり早い時期から、「よく動く子」と「動かない子」に分かれているという印象が語られた。

そこで2000年には、4歳児を対象に、終日の身体活動量を、加速度計（スズケン社製ライフコーダ）を用いて2週間測定し、運動能力と身体活動量の関係を検討することで、この印象の検証を試みた<sup>4,5,6)</sup>。1日の平均歩数、平均運動量（kcal）、全運動の平均積算時間（分）において、男児では運動能力評定点上位群と下位群間に有意差が認められなかったが、女児ではすべての測定値において、運動能力評定点上位群が下位群に比べて有意に高かった。対象園の女児に関しては、日常生活の中で「よく動く子」と「動かない子」に別れる傾向が認められ、そのことが運動能力に影響を及ぼしていると考えられた。また評定点下位群女児に対して、保育者が感じていた“静かに遊ぶことが多い”という漠然とした印象が、活動歩数や運動強度の問題として裏付けられた。

このことから、子どもたちに日々接する保育者の印象を具体的にすることは、子どもの生活に根ざした有益な視点になると感じられたのである。保育者にとって、「よく動く子」「動かない子」の様子は感覚的には概ね了解されているようだが、評価の視点が明確に示されているとは言えない。「よく動く子」とは響きのよい表現であるが、いかにも抽象的であって、保育者にとって様々に捉えられる包括的で便利な言葉でもある。今後、身体活動性を高める研究や介入を進める上でも、1人ひとりの子どもの身体活動を捉える視点を整理する意義は大きいと考えられる。そのためには、保育者が子どものからだところ双方向の作用を洞察した尺度が必要であり、それによって個別のつまりきや集団での障壁を把握することが可能となり、援助は柔軟で具体的な方向へと導かれると考えられたのである。幼児における身体活動に限定してみると、杉原<sup>7)</sup>らが、幼児の自己回答形式で行う「幼児の改訂版運動有能感尺度」を作成し

## 幼児の身体活動性を高める要因の検討

表1 「子どもアクティビティ尺度」開発の手続き



ているが、保育者が子どもたちの身体活動に対する視点を共有できる尺度は未だ開発されていない。

近年、幼児における身体活動分野の研究は著しく不足している。遊びのなかで幼児の自発性を大切に育むことが重視されたことによって、一方で運動指導という立場が否定される傾向が続いている。この傾向は、運動教育の是非に関わる本質的な問題というよりも、遊びこそが心身の発達の基礎を養う上で重要であるという保育の理念と、一

斉か自由かという保育形態の論議の混乱にすぎないと考えられるが、現状として、保育者は子どもたちの身体活動の支援に臆病になり、遊びをコアとした運動指導方法の追究を放棄してしまった感がある。子どもたちの運動遊びを豊かにするためには、今こそ保育者を中心にした大人の意図的な介入が不可欠なのである。その視座に立った実践的研究を進めるうえでも尺度開発の意義は大きいと考えた次第である。

このような動機に基づいて開発する尺度には、幼稚園・保育所内と家庭内の 2 局面が必要となるだろうが、まず幼稚園・保育所内での生活に焦点を当てた尺度を作成することにした。すでに地域や家庭においては、子どもたちの身体活動を確保できる時間と環境が保障されているとは言い難く、幼稚園・保育園の時間と環境が最も整備されている状況であり、これらの場への介入が最も効果的であると考えられたためである。

## 2. 開発の手順

子どもアクティビティ尺度の開発は 3 つの手続きを経て行われた。表 1 には、3 つの手続きの目的と方法を示した。結果と考察については本章で順次述べていきたい。

本尺度の開発では、研究者側の予測された尺度項目を用いた方法をとらず、手続きの第一歩として、「よく動く子」という概念に着目し、保育者の場面描写や状況記述の分析から「よく動く子」の概念を具体化し評価尺度の項目を収集した点に特徴がある。「よく動く子」とは、いくつもの小さな要素が重なりあって、結果として「よく動く」と感じられていると思われた。そこで、その小さな要素を見出し整理することによって、保育の文脈を息づかせ、なおかつ保育場面で活用できる簡便な尺度となると考えられた。さらに幼児の場合、自己報告の回答では信頼性が得られにくく<sup>8)</sup>、代理評価の形式が尺度の運用を円滑にすると考えられたため、評価する側の保育者の印象から項目を導き出すことが有効と考えられた。それによって本尺度が、幼児の身体活動性を高めるための知見として洗練され、保育現場に還元しうる道具として活用が期待できる。本研究では、この手続きを経て幼児の身体活動評価尺度項目を作成し、その後、信頼性と妥当性を検証した。

手続き I : 「よく動く子」の概念の具体化からの項目収集と尺度項目選出

### 1) 「よく動く子」を構成している側面と要因

回収された自由記述からは、1195 例 (保育者 1 人あたり平均 7.9 例) の記述が抽出された。記述には 1、2 歳児対象のものも少数みられたが、あらかじめ除外し 3 歳児以降を対象とした。内容の

読み取りによって、意味が近いものを集約し文言を作成し項目とした。その後、1195 例の記述について、どの項目に該当するかを研究者の合議で再度検討し分類を行った。その結果、最終的に 56 項目に分類され、さらに 3 側面 9 要因 (A 運動遊びの傾向の側面 : 4 要因 19 項目、B 遊び (運動遊びを主とした) における行動傾向の側面 : 4 要因 21 項目、C 日常生活の側面 : 11 項目) にまとめられた (表 2-1, 表 2-2)。

### 2) 「よく動く子」の年齢及び性別の傾向

年齢別の記述数の割合は、5 歳児 41.2%、4 歳児 36.6%、3 歳児 22.3%、性別の割合は、男児 59.2%、女児 27.6%、男女児 13.2%であった。どの年齢においても男児に関する記述が多かった。しかし、男児女児共通と示された記述も 13.2%あり、「よく動く子とを感じる様子は男女の別は無いと感じる」「遊び内容の違いはあっても遊びに取り組む様子はあまり変わらない」「意欲面では男女の差は特にないと思う」などの内容が書き添えられた記述もかなりみられた。「よく動く子」として印象にあげられるのは男児が多いが、「よく動く子」の概念を構成する内容には性別の大きな違いはないと解釈されたため、本尺度は性別の項目は作成しないこととした。また、3 歳児については社会性や運動能力の発達に伴った個人差が著しく、保育者の評価観点や水準がばらつくことが予想されるため、4、5 歳児を対象とした項目の作成を目指した。その後、4 歳児と 5 歳児の記述内容には、年齢による顕著な違いは見られず、共通した項目が収集されていることが確認された。









### 3) 尺度項目選出の視点

収集された 56 項目から幼児の身体活動評価尺度に相応しい項目を選出するために、以下の 4 つの視点から検討を加えた。

第一には、「C 日常生活の側面」(表 2-2) の扱いについて検討を行った。この側面での項目は、例えば「保育者の手伝いや他の子のめんどうを見られる」のように、「よく動く子」と特定された子の生活の様子を描写し傾向を表現した記述が多いため、これらを「よく動く子」としての普遍的な活動性に関わる要因と解釈してよいかという疑

幼児の身体活動性を高める要因の検討

表 2-1 子どもアクティビティ尺度 4 因子と保育者の記述から抽出された「よく動く子」の内容との関連

因子	側面	要因	項目	記述数
○数字は最終的な尺度項目 ( )数字は研究 I で尺度項目として選出された項目				
<b>A 運動遊びの傾向の側面</b> <span style="float: right;">記述総数 685 例</span>				
プレイ 	a 運動遊びの志向		1 登園するとすぐに戸外に出て遊ぶ	72
			2 自由遊びの時間は外遊びをすることが多い	69
			③ 身体を活発に動かして遊ぶことを好む	46
リーダー 	b 運動遊びの内容		① ルールのある集団遊びや競いあう遊び（ドッチボール、サッカー、鬼ごっこ、かんげり、リレーなど）に積極的に参加する	85
			2 ごっこ遊びに積極的に参加する	53
			③ 課題を克服する遊び（竹馬、のぼり棒、なわとび、うんてい、マット、鉄棒などに意欲的に挑戦する	38
			4 リズム遊び（踊り）に積極的に参加する	31
			⑤ いろいろな運動遊びに進んで取り組む	21
			(6) 固定遊具や乗り物遊具で遊ぶことを好む	5
リーダー 	c 身体活動の量や強度		1 いつも走っている	46
			2 動きに緩急があり身のこなしが巧みで機敏に動いて遊ぶ	45
			3 1日中元気でいつも動き回っている	44
			④ 身体を思いっきりよく大胆に動かして遊ぶ	32
			⑤ 汗をたくさんかいて遊ぶ	11
			⑥ 座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い	4
リーダー 	b 運動遊びの空間		1 園内や園庭を広く使って遊ぶ	53
			② 遊具から遊具へ移動して遊ぶ	9
<b>B 遊び（運動遊びを中心とした）における行動傾向の側面</b> <span style="float: right;">記述総数 399 例</span>				
チャレンジ 	a 自己実現と創意工夫		1 遊びに対するイメージがはっきりしている	58
			② 遊びのなかで友達をリードすることが多い	44
			③ 遊びのなかで自分の考えやアイディを試したり提案したりする	33
			④ 遊びのなかでいろいろな決断をまかされている	9
リーダー 	b 社会的行動		(1) 自分から友達を誘って遊ぶ	40
			② 周囲の子をよく見ていて真似して遊ぶ	30
			③ 友達に関わって一緒に遊ぶ	25
			4 リーダーシップを取りたがり無理に友達を引き入れたり制止させたりする	12
			⑤ 自分から遊びに加わっていきける	8
			(6) 友達の考えや思いを受け入れて遊びをすすめることができる	4
			7 遊具や順番などが譲れない	2
			(8) うまくできない子やルールわからない子を助けたり教えたりする	1
リーダー 	c 好奇心と持続性		(1) 好奇心旺盛でどんな遊びにも意欲的で活気がある	36
			(2) どんなことでも遊びにになってしまう	18
			3 遊びに集中力がある	7
			4 遊びの中断や中止に抵抗する	6
ソーシャル 	d 活動の積極性		1 どんなことにも自分の目標を持ち、それに向かって真剣に挑戦する	33
			(2) 負けず嫌いで友達にできることはどんなことでもできるようにしたいと努力する	12
			3 運動には自信を持っており得意気に行う	11
			4 他の子にとっても魅力的な存在であり一緒に遊びたがられたり真似されたりする	4
			(5) 年長の子や異性（男児）が行う新しい遊びや難しそうな遊びに興味を持って挑戦する	6

\* 子どもアクティビティ尺度 4 因子における絵図は本尺度利用に向けて独自に作製されたものである

表 2-2 子どもアクティビティ尺度 4 因子と保育者の記述から抽出された「よく動く子」の内容との関連  
：尺度項目選出において除かれた側面

記述総数 111 例

C 日常生活の側面			
生活習慣	1	歌声や声が大きく、よく話す	18
	2	食欲が旺盛である	5
	3	昼寝は熟睡している	1
情緒の安定	1	情緒が安定しており感情をからだ全体で豊かに表現する	15
	1	話を聞いたり細かい製作などはじっとしていられずじっとり取り組めない	43
好奇心と持続性	2	興味のないことには取り組もうとしない	2
	3	その場の雰囲気に流されやすい	3
	1	周囲の状況に関心をはらい自分から先を見通して進んで行動する	7
自己実現と創意工夫 社会的行動	1	保育者の手伝いや他の子のめんどうを見られる	12
	2	けんかなどトラブルのもとになることが多い	3
	3	周囲を気づかい優しい言葉をかけたり慰めたりする	2

問が残された。日常生活の行動や状態が身体活動意欲と無関係とは思えないが、今回の尺度は、活動性を高めるための介入を前提とした観点を中心とし、かつできるだけ簡便にしたいため、項目選出の手続きとして、これら 11 項目を除くことにした。

第二には、項目の内容が、“特性”を焦点としているか、“状況”を焦点としたものかを区別し、特性と捉えられる項目を除くことであった。特性と考えられるのは、例えば“1日中元気でいつも動き回っている”“他の子にとっても魅力的な存在であり一緒に遊びたがられたり真似されたりする”などの項目である。幼児における介入の目的は、最終的には好ましい運動習慣や意欲を身につけさせる長期的な“特性”の変容であろうが、それらは、時間や条件に合わせてひとつひとつの行動を変容させるという“状況”の積み重ねによって形成されると考えられる。したがって、今回の尺度では、比較的短期の介入の効果として捉えやすい“状況”を焦点とした項目を採用することにした。

第三には、「登園するとすぐに戸外に出て遊ぶ」のように各園のプログラムや条件によって、その状況が異なることが予想される項目を削除し、第四には、内容的に近いと思われるものを集約した。その結果、最終的に 23 の幼児の身体活動に関する項目を選出した。

手続きⅡ：尺度（子どもアクティビティ尺度）の開発

1) 幼児における身体活動の因子構造（表 3）

幼児における身体活動に関する項目について、探索的因子分析を行った結果、因子の解釈可能性の観点から、4 因子解が最適であると判断されたため、因子負荷量が 0.40 以下の項目及び 2 重負荷のかかった項目を除き、4 因子で再度同様の因子分析を行った。この結果、4 因子 15 項目が、幼児における身体活動に関する項目として抽出された。

第Ⅰ因子には 6 項目が含まれ、その内容は「座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い」、「汗をたくさんかいて遊ぶ」など、幼児の実際の遊び状況を表す項目群であった。したがって、第Ⅰ因子は「プレイ」に関する因子であると考えられた。本尺度の因子名は、保育者にとってイメージが湧きやすく親しみが持てるという観点で命名することとした。

第Ⅱ因子には 3 項目が含まれ、その内容は「遊びのなかで友達をリードすることが多い」、「遊びのなかでいろいろな決断をまかされている」などといった、遊び場面でリーダーシップを表す項目群であった。したがって、第Ⅱ因子は「リーダー」と命名した。

第Ⅲ因子には 3 項目が含まれ、その内容は「いろいろな運動遊びに進んで取り組む」、「課題を克服する遊びに意欲的に挑戦する」などといった、遊び場面で課題にチャレンジすることを表す項目

幼児の身体活動性を高める要因の検討

表3 手続きⅡ：子どものアクティビティ尺度の因子構造（主因子法・プロマックス回転）

項目番号	項目	因子負荷量				共通性
		I	II	III	IV	
<b>第Ⅰ因子：プレイ</b>						
Ac6	座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い	.88	-.10	-.05	.00	.61
Ac5	汗をたくさんかいて遊ぶ	.83	.07	-.09	.04	.62
Ac4	身体を思いっきりよく大胆に動かして遊ぶ	.71	.10	.18	-.04	.73
Aa3	身体を活発に動かして遊ぶことを好む	.71	-.01	.21	-.05	.65
Ad2	遊具から遊具へ移動して遊ぶ	.60	-.02	-.05	.14	.42
Aa5	洋服などが汚れることを気にしないで遊ぶ	.59	-.04	-.10	-.04	.26
<b>第Ⅱ因子：リーダー</b>						
Ba2	遊びのなかで友達をリードすることが多い	.06	.96	-.05	-.02	.81
Ba4	遊びのなかでいろいろな決断をまかされている	-.02	.92	.04	-.05	.78
Ba3	遊びのなかで自分の考えやアイディアを試したり提案したりする	-.11	.77	.00	.14	.66
<b>第Ⅲ因子：チャレンジ</b>						
Ab5	いろいろな運動遊びに進んで取り組む	.04	-.05	.86	.01	.64
Ab3	課題を克服する遊び（竹馬、のぼり棒、なわとび、うんてい、マット、鉄棒など）に意欲的に挑戦する	-.08	-.03	.81	.06	.55
Ab1	ルールのある集団遊びや競いあう遊び（ドッチボール、サッカー、鬼ごっこ、かんけり、リレーなど）に積極的に参加する	-.02	.09	.75	-.03	.54
<b>第Ⅳ因子：ソーシャル</b>						
Bb3	友達に関わって一緒に遊ぶ	-.01	.02	-.03	.93	.63
Bb5	自分から遊びに加わっていきける	.07	.01	.07	.70	.58
Bb2	周囲の子をよく見ていて真似して遊ぶ	-.01	.02	.03	.49	.26

群であり、「チャレンジ」と命名した。

第Ⅳ因子には3項目が含まれ、その内容は「友達に関わって一緒に遊ぶ」、「自分から遊びに加わっていきける」といった、遊び場面での協調性や社会性を表す項目群であり、「ソーシャル」と命名した。

以上、探索的因子分析の結果から、幼児用身体活動評価尺度は、6つの「プレイ」に関する項目、3つの「リーダー」に関する項目、3つの「チャレンジ」に関する項目、及び3つの「ソーシャル」に関する項目により構成されることが明らかになった。そこで、この4因子を総括し、子どもたちのアクティビティを高めたいという意味と願いを込めて、本尺度を「子どもアクティビティ尺度」と称することにした。

手続きⅢ：「子どもアクティビティ尺度」の信頼性及び妥当性の検討（表4）

<信頼性の検討>

1) 内的整合性：各因子のクロンバック $\alpha$ 係数の範囲は、0.78~0.92と高い水準にあり、本尺度が非常に高い内的整合性を有していることが明らかになった。

2) 再現性：検査-再検査間の一致率は、0.75~0.82と高い係数を示し、本尺度の再現性が確認された。

<妥当性の検討>

1) 検証的因子分析による構成概念妥当性の検討  
項目間の相関行列の全分散を説明する程度を表す適合度指標は、いずれも高い値（GFI=0.923, AGFI=0.890, RMSEA=0.065）を示し、構成概念妥当性が認められた。

2) 加速度計の測定結果との比較による併存的妥当性の検討

「よく動く子」は、身体活動量の多寡とは必ず

表 4 手続きⅢ：子どもアクティビティ尺度の信頼性と妥当性

因子名	信 頼 性		妥 当 性			
	内的整合性 $\alpha$ 係数	再現性	併存的妥当性：相関係数			
		検査-再検査 相関係数	男 児 n=55		女 児 n=58	
			歩 数	運動量	歩 数	運動量
プレイ	0.87	0.79	0.66	0.52	0.60	0.44
リーダー	0.92	0.79	0.47	0.46	0.47	0.38
チャレンジ	0.84	0.82	0.53	0.39	0.61	0.44
ソーシャル	0.78	0.75	0.34	0.25	0.44	0.40

しも同義ではないだろう。しかし、Chen et al<sup>9)</sup>が、保育士による 3、4 歳児の身体活動量への評価と歩数計を用いた活動量測定結果との相関から、子どもの活動性に関する保育士の評価の有効性を示していることから、本尺度の妥当性の検討においては一定の客観的指標となると考えられた。

結果は、男児において、歩数とすべての因子合成点の間で有意な相関係数を示し、運動量に関しても「ソーシャル」を除く 3 因子で有意な相関を示した。女児においても、各因子と歩数および運動量との間に有意な相関が示された。すべての相関係数が高い値を示したとはいえないが、保育者の観察や印象によって評価する測度であるアクティビティ尺度のほとんどすべての因子合成点と客観的指標であるライフコーダの測定結果の間に有意な相関を示したことから、本尺度の併存的妥当性が認められたといえる。

### Ⅲ. 幼児の身体活動性を促す要因

子どもアクティビティ尺度開発のプロセスは、保育者が適切に評価のできる項目の選出手がかりに、幼児の身体活動性を高める要因を精選する作業であった。そこでは、保育者の観察をもとにした記述から評価項目を拾い上げることによって、実際に保育場面で生かせる有用な知見が得られたかが問われているのである。アクティビティを高める因子は、プレイ、リーダー、チャレンジ、ソーシャルであることが導き出されたが、本章では、保育者の記述から尺度項目を選出した際に立ち戻り、選出されなかった項目を含めて、この 4 因子と「よく動く子」の側面と要因との関連(表 2-1)をもとに考察を進めてみたい。

#### 1) プレイ

プレイ因子の 6 項目は、手続き I での保育者の記述から抽出した「よく動く子」の内容における「運動遊びの傾向の側面」のなかの「運動遊びの志向」と「身体活動量や強度」「運動遊びの空間」の 3 要因にわたって採択されている。ここでの“運動遊び”とは、全身的で大筋的な身体活動を伴う遊びを指す。

「Aa 運動遊びの志向」要因のなかでの「2. 自由遊びの時間は外遊びをすることが多い」は、「自由遊び」が、保育形態なのか理念的な解釈なのかという点で、定義が一律にならないことが予想される点や、「4. 室内でも活発に動かして遊ぶことを好む」では、保育者によって評価が肯定、否定に別れると考えられたため評価項目から除くことにした。その結果、「3. 身体を活発に動かして遊ぶ」「5. 洋服などが汚れることを気にしないで遊ぶ」の 2 項目を選出し、手続き II を経て尺度の評価項目に採択されたのである。

「Ac 身体活動の量や強度」要因として集約された記述は、遊び内容などの観察を通して運動の質と量への理解に至った内容が中心であった。例えば“高い所に登るなどの危なっかしい遊びが多いが、身のこなしが軽く不思議と怪我をしない”“虫取りなどが上手く動きが素早い”“次から次へと遊びを移り、汗びっしょりでも平気”“固定遊具でよく遊び、動きがダイナミック”などである。この要因内では、まず、子どもの一般的な特性として表現されやすい「1. いつも走っている」「3. 一日中元気でいつも動き回っている」の 2 項目を除いた。「2. 動きに緩急があり身のこなしが巧みで機敏に動いて遊ぶ」と「4. 身体を思いっ

きりよく大胆に動かして遊ぶ」については、保育者の観察で直接的な状況が捉えやすいと考えられる後者（「4. 身体を思いっきりよく大胆に動かして遊ぶ」）を選出した後、採択された。

「Ad 運動遊びの空間」の要因の「1. 園内や園庭を広く使って遊ぶ」では、“まわりをよく見ながら魅力的なところを探し広い範囲で遊ぶ”、「2. 遊具から遊具へ移動して遊ぶ」では“探検ごっこなどで大型遊具をいろいろな物に見立てて移動して遊ぶ”“挑戦したい気持ちからか、遊ぶ遊具がよく変わる”などの記述例が見られた。保育者にとってより具体的な状況が観察しやすい「2. 遊具から遊具へ移動して遊ぶ」を選出し、採択された。

「プレイ」因子では、「よく動く」という印象が、総じて戸外での運動遊びを好んで行う状況と強く結びついていることが読み取れた。行動レベルでは「Aa 6. 座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い」に見られるように、座位行動よりも立位行動を積極的に評価していくことが求められている。さらに「Aa 5. 洋服などが汚れることを気にしないで遊ぶ」には、幼児にとっての遊びが、自ら進んで取り組むもの（自発性）であり、遊ぶことそれ自体に目的がある（自己完結性）という考え<sup>10)</sup>に裏付けられるように、湧き上がる感情によってからだが開放され一心に遊ぶ姿を期待する視点が含まれていると考えられた。幼児の身体活動性を高めるためには、戸外遊びによってまず身体活動量を確保することで、運動の質が高められていくプロセスが必要なが認められた。そのためには、子どもたちの遊びに必要な場と時間を保障する重要性が示唆されたのである。

## 2) リーダー

リーダー因子の3項目は、「B 遊び（運動遊びを中心とした）の行動傾向の側面」における「Ba 自己実現と創意工夫」要因から選出され、手続きⅡを経て採択されている。

「1. 遊びに対するイメージがはっきりしている」の「イメージ」という文言は、“自分のしたい遊びや目的がはっきりしている”“アイデアが豊富で遊びをおもしろくしようとする”“の記述に見られるように、経験や認知力を基にして生まれ

る様々な発想と定義して用いている。しかしながら、河邊<sup>11)</sup>は、現状の保育現場では、“イメージ”という言葉、ごっこ遊びの中で幼児の言葉や行動を見る時や、製作場面で物を創り出す力として見る事が多く、ルールの理解に重点が置かれる運動遊びでは、幼児の行動を“イメージ”という観点で見ようとする傾向を問題としている。このことから、運動遊びの場面での評価の際には、“イメージ”の解釈が異なり評価水準がばらつくことが予想されたため、今回の尺度項目からは除くことにした。

「2. 遊びのなかで友達をリードすることが多い」では、“リードする”という文言を、リーダー的に振る舞うという行動レベルの捉え方だけでなく、“自分の遊びを工夫しながら他の子を巻き込んで中心となって遊びの流れをつくる”などの記述にみられるように、遊びのなかで創意工夫しながら自己実現に向かう様子を含んで用いている。「3. 遊びのなかで自分の考えやアイデアを試したり提案したりする」は、“方法を思いつくとすぐに試す”“自分の考えをはっきり言葉にして遊ぶ”などの記述に基づいており、「4. 遊びのなかでいろいろな決断をまかされている」では、“遊びのルールもよく知っており皆に頼られている”“遊びのルールを決めることが多い”などの記述を集約している。

リーダー因子からは、周囲の状況や人に関心を持って自己の世界を拡張、イメージを創り出し自己表現していくような意欲の喚起が、身体活動性を高めるプロセスに大きな影響を与えることが示唆された。同時に、子どもたちが自ら独自の方法で環境に働きかけることのできる経験の場として、身体活動の意義が確認された。

## 3) チャレンジ

チャレンジ因子の3項目は、「運動遊びの傾向の側面」のなかの「Ab 運動遊びの内容」要因から選出し、手続きⅡを経て採択されている。

「Ab 運動遊びの内容」では、「2. ごっこ遊び」の解釈の点で論議が集中した。ごっこ遊びの経験が子どもたちに与えるものの大きさは自明である。しかし一方で、近藤<sup>12)</sup>が、子どもの遊びの本質的な楽しさは、野球もサッカーも、野球ごっこ、サッ



カーごっことして行うところにあると述べている。

“野球選手になりたい夢もあり、その気になってボールを受けたり投げたりし野球ごっことして楽しみ、相手が疲れても、もっと投げてと催促し目がイキイキしている”の記述にも示唆されるように、運動遊びにおける“ごっこ遊び”の解釈や枠組みが広義になりすぎて、評価を曖昧にするとも考えられたため、項目からは除いた。また「4. リズム遊び」は、31例中25例が女兒に限定した記述であり、性別の偏りが顕著なため除外した。

採択された「1. ルールのある集団遊びや競いあう遊び」「3. 課題を克服する遊び」の内容を考えてみると、これらは運動を通じて自己を追求する活動<sup>13)</sup>と捉えることができるのではないだろうか。また「5. いろいろな運動遊びに進んで取り組む」ことを含めて、そこは失敗を覚える場でもあり、危険に挑もうとする自信と意志を培う絶好の機会でもある。チャレンジとは、自己の能力を追究しながら達成感や有能感を得る過程を支える重要な要因なのである。「よく動く」ことが身体的な面だけでなく、こころの問題と強く結びついていることを示しており、行うこと自体を楽しみながらチャレンジする意欲が、こころとからだの有機的な循環を促し、身体活動の質を高めることが確認された。

#### 4) ソーシャル

ソーシャル因子の3項目は、「B 遊び(運動遊びを中心とした)の行動傾向」の側面における「Bb 社会的行動」要因から選出され、手続きⅡを経て採択された。

「Bb 社会的行動」要因では、「4. リーダーシップを取りたがり無理に友達を引き入れたり制止させたりする」「7. 遊具や順番などが譲れない」などの社会性に欠けると捉えられる項目も抽出された。幼児は自己中心的で、結果として、しばしばけんか早く、他人と分け合ったりすることが困難であると言われるように<sup>14)</sup>、上記のような仲間とのいざこざが、自分の欲求を適切に表出させるための社会的スキルを獲得する行動と理解する必要がある。しかしながら、このような行動傾向を、身体活動性の要因としてどのように理解して位置付けるのかという課題が残されたため項目からは

除いた。

採択された「3. 友達に関わって一緒に遊ぶ」「5. 自分から遊びに加わっていける」「2. 周囲の子をよく見ていて真似して遊ぶ」は、集団参加への積極性と解釈することができる。これらの3項目からは、「関わる」から「加わる」、さらに「共感できる」という行為が、集団参加への意欲の強さであることが示唆され、運動遊び場面でのコミュニケーション能力の水準を示しているとも考えられる。したがって、これらの項目に対して高い評価が得られる子どもは、より豊かに仲間との交流を持つことが可能になっていると考えられる。中村<sup>15)</sup>が、子どもの遊びには「時間」「空間」「仲間」が必要であると述べているが、本尺度を用いた評価によって、「仲間」の観点から、一人ひとりの子どもに対して、どのステップへと導くための支援が必要かという課題にアプローチできる。同時に、その集団に対しても、集団内のコミュニケーションを促進させるために、どのような環境を提供することが必要なかを把握する視座を提供できると考えられる。

ソーシャル因子における身体活動量との相関(表4参照:併存的妥当性:歩数・運動量)を見ると、両者の関係はあまり強くないように考えられるが、一方で近年の幼児期の戸外遊びの減少と、児童・青年期における仲間関係構築の不器用さや不満足感の増加傾向は、どこかで深く結びついているように思われる。ソーシャル因子を、身体活動性を高めるための土壌と位置づけ、子ども時代への対応だけでなく、将来を見据えた支援を方向づける重要な要因と捉えることが肝要であろう。

#### IV. 保育現場への活用可能性と今後の課題

「子どもアクティビティ尺度」は、「よく動く子」を総合的な概念として規定し、保育者の観察記述から因子の抽出や項目の選出を行い、その後一定の手続きを経て開発された。さらに、本論文での検討からは、実践の構想に向けての貴重な示唆が得られた。それらが今日的課題に直結している点からも、今後尺度活用のシステムを構築することによって、本尺度の保育現場での活用が期待される。そのためには、子どもたちの身体活動性を高める実践を軸にした実証的研究が必要となる。次

世代を担う子どもたちを中心に置き、保育者と研究者が、活発な意見交換や情報交流を含めた協働関係を築いていくことが望まれる。

【引用・参考文献】

- 1) 鈴木裕子 (2004) 幼児の身体活動評価尺度の開発：子どもアクティビティ尺度. 体育学研究 50 巻第 5 号. 557-568
- 2) 藤充夫・杉原隆 (1999) 幼児の運動能力検査の標準化と年次推移に関する研究. 文部省科学研究費補助金 (基盤研究 B)・研究報告書.
- 3) 鈴木裕子 (2000) 幼児の運動能力に関する調査研究－名古屋柳城短期大学附属豊田幼稚園の実態と課題－. 名古屋柳城短期大学研究紀要 22. 87-100
- 4) 鈴木裕子 (2001) 4 歳児における身体活動と運動能力に関する研究－ライフコーダを用いた身体活動量の測定評価－. 名古屋柳城短期大学研究紀要 23. 97-107
- 5) 鈴木裕子 (2001) 幼児の身体活動量と運動能力の関係. 日本体育学会第 52 回大会号. 419
- 6) 鈴木裕子 (2003) 幼児の運動能力と身体活動量－幼児の活動意欲形成プログラム作成の基礎資料として－. 聖公会保育 10. 1-7
- 7) 杉原隆 (1998) 運動遊びが幼児の心理的発達に及ぼす影響. 文部省科学研究費補助金 (基盤研究 C)・研究報告書.
- 8) Sallis, J. and F., Owen, N. 竹中晃二監訳 (2000) 身体活動と行動医学. 北大路書房. 54-57
- 9) Chen, X., Sekine, M., Hamanishi, S., Wang, H., Hayashikawa, Y., Yamagami, T. and Kagamimori, S. (2002) The validity of nursery teachers' report on the physical activity of young children. J. Epidemiol., 12: 367-374
- 10) 小川博久 (1990) 4～5 歳児の遊びが育つ. フレーベル館. 10-24
- 11) 河邊貴子 (2000) 運動遊びの意義. 河邊貴子編. 健康の探究. 相川書房. 50-51
- 12) 近藤充夫 (1998) 子どももの心と健康と遊びとスポーツ. 教育と医学 46 (8). 36-42
- 13) Pellegrini, A. D., and Smith, P. K. (1998) Physical activity play: The nature and function of a neglected aspect of play. Child Development,. 69. 577-598
- 14) ガラヒュー：杉原隆ほか訳 (1999) 幼少年の体育. 大修館. 45-50. David, L. Gallahue, (1996) Developmental physical Education for Today's Children, McGraw-Hill
- 15) 中村和彦 (2004) 子どもものからだ危ない!. 日本標準. 75

## **Examination of Factors to Increase Physical Activity in Young Children**

Suzuki, Yuko\*

This study examines the factors that promote physical activity in young children based on the knowledge acquired through development process of the evaluation scale for young children' physical activity. In Part I, utilizing questionnaires that were completed by kindergarten and day-nursery teachers, we clarified the concept of "Active Child", and selected relevant items as part of the evaluation scale. In Part II, through factor analysis of the data collected in part I, we divided the concept of physical activity into four factors: F1: Playing, F2: Leadership, F3: Challenge, F4: Socialization. In Part III, we confirmed the reliability and validity of the evaluation scale through examinations. Finally, we concluded that the four factors of "Active Child" defined in this paper provide valuable insight to promote physical activity in young children.

キーワード：身体活動 (*physical activity*), 保育者 (*kindergarten and nursery teachers*),  
よく動く子 (*active child*), 尺度開発 (*development of a scale*)